

美術評論家連盟主催 2016年度シンポジウム

「美術と表現の自由」

致

文部科学省に物申す会

田家

も一と教師を地やせ。人々を導くは其の責なり。然るに先進国は多量に教育費を投入し、その結果として、人々の知識と技能が飛躍的に向上し、社会の発展に大きく貢献している。我が国も同様に、教育の重要性を認識し、教育費を増やして、人々の質を高め、社会の発展に貢献すべきである。

しかし、我が国の教育は、長い歴史の中で、画一的なカリキュラムと試験による評価が主流であり、個性や創造性を伸ばすことに十分な配慮がなされていない。これは、人々の多様な才能を十分に引き出し、社会の発展に貢献させる上で、大きな課題となっている。

文部科学省は、教育の質を向上させるために、様々な施策を講じている。しかし、その中でも、教育の自由を確保し、個性や創造性を伸ばすことに十分な配慮がなされていない。これは、人々の多様な才能を十分に引き出し、社会の発展に貢献させる上で、大きな課題となっている。

私たちは、文部科学省に物申す会として、この課題を指摘し、改善を求めたい。具体的には、以下のような施策を講じてほしい。

1. 教育の自由を確保し、個性や創造性を伸ばすことに十分な配慮がなされること。

2. 教育費を増やし、教育の質を向上させること。

3. 教育の多様性を促進し、人々の多様な才能を十分に引き出すこと。

以上を踏まえ、文部科学省に物申す会として、この課題を指摘し、改善を求めたい。

2016年7月24日[日] 13時-17時

東京都美術館 講堂(東京都台東区上野公園8-36)

入場無料/定員210名/申込不要・当日先着順(12時30分開場)

このたび国際美術評論家連盟日本支部では美術と表現の自由に関するシンポジウムを開催いたします。

本シンポジウムは、ろくでなし子氏の逮捕とそれに続く裁判、愛知県美術館に展示された鷹野隆大氏の作品に対する愛知県警察からの撤去指導、そして東京都現代美術館による会田家の作品撤去または改変要請をはじめ表現の自由が問われる事件が近年つづけて起きたことをうけ企画されました。

日本国憲法第21条には「表現の自由」と「検閲の禁止」が明記されていますが、美術における表現の自由は、事件として公になったものから事件化に至らず「自主規制」によって水面下に消えたものを含めさまざまな制約を受けてきました。

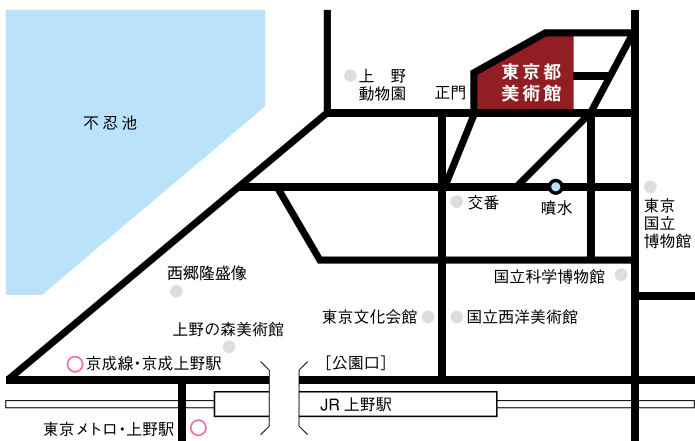
美術評論家連盟の会員は美術表現の当事者として美術表現の自由を擁護し推進する立場にあります。公権力、スポンサーシップ、禁忌、自主規制を促す暗黙裡の強制など性質を異にする制約のなかでどのように美術表現は自由を確保するのか。それらの制約の構造と性質を分析し、歴史を参照しつつ、さらなる「美術表現の自由」へと歩みを進めることを本シンポジウムは目指します。



判決後、弁護団主催の説明会におけるろくでなし子氏
2016年5月9日



鷹野隆大 おれと with KJ#2(2007) 2007
変更後の展示風景:「これからの写真」
愛知県美術館、2014



- JR上野駅「公園口」より徒歩7分 ●京成電鉄京成上野駅より徒歩10分
- 東京メトロ銀座線・日比谷線上野駅「7番出口」より徒歩10分
- *駐車場はございません

■お問合せ | 美術評論家連盟 事務局(担当:山内舞子)
aicajpn@gmail.com 090-7635-1370(直通) TEL/FAX 03-3690-6394

前半 | 事例発表(5名・各15分)

[発表者](登壇予定順・敬称略 ▶は美術評論家連盟会員)

■林道郎 ▶

1959年北海道生まれ。上智大学国際教養学部教授。美術史および美術批評。主な著作に『絵画は二度死ぬ、あるいは死なない』(2003-9年)、『Tadaaki Kuwayama』(2014年)、『死者とともに生きる』(2015年)、共編書に『From Postwar to Postmodern: Art in Japan 1945-1989』(2012年)などがある。美術批評誌『Art Trace Press』(2011年-)の編集および執筆を務める。



■土屋誠一 ▶

1975年月神奈川県生まれ。美術批評家。沖縄県立芸術大学美術工芸学部准教授。専門分野は近・現代美術史および写真論。共著に『実験場 1950s』(2012年)、『現代アートの巨匠』(2013年)、『現代アートの本当の見方』(2014年)、『キュレーションの現在』『拡張する戦後美術』(2015年)など。展覧会企画に『disPLACement 場所の置換』(2005年-)、『反戦』(2014年)などがある。



■中村史子

1980年愛知県生まれ。愛知県美術館学芸員。主な展覧会企画に「放課後のはらっぱ—櫃田伸也とその教え子たち」(2009年)、「魔術/美術 幻視の技術と内なる異界」(2012年)、「これからの写真」(2014年)、「伊東宣明「アート」」(2015年)、「飯山由貴「Temporary home, Final home」」(2015年)など。共著に『キュレーションの現在』(2015年)がある。



■小勝禮子 ▶

1955年埼玉県生まれ。近現代美術史、ジェンダー論、美術批評。元栃木県立美術館学芸課長。展覧会企画は「奔る女たち 女性画家の戦前・戦後1930-1950年代」(2001年)、「前衛の女性1950-1975」(2005年)、「戦後70年:もうひとつの1940年代美術」(2015年)ほか多数。共著に『記憶の綱目をたぐる—アートとジェンダーをめぐる対話』(2007年)など。



■光田由里 ▶

1962年兵庫県生まれ。美術評論家。富山県立近代美術館、渋谷区立松濤美術館学芸員を経てDIC川村記念美術館学芸課長。著書に『野島康三写真集』(2009年)、『高松次郎 言葉ともの』(2011年)など。展覧会企画は「岡本信治郎 空襲25時」(2011年)、「ハイレッド・センター 直接行動の軌跡」(2013-4年)、「美術は語られる 中原佑介の眼」(2016年)ほか多数。



後半 | パネルディスカッション

パネリスト:小勝禮子、土屋誠一、中村史子、林道郎、光田由里

■モデレーター:清水敏男 ▶

1953年東京生まれ。美術評論家、学習院女子大学教授。東京都庭園美術館、水戸芸術館現代美術センターを経て現職。展覧会企画は藤田嗣治、ロバート・メイプルソープ、ジェニー・ホルツァー、ジェームス・タレルなどの個展、『幸福幻想』(1995年)、『THE MIRROR』(2014年)など多数。2000年上海ビエンナーレ組織委員・芸術監督。



■主催 | 美術評論家連盟 ■会場 | 東京都美術館 講堂
■企画 | 実行委員会:清水敏男(委員長)、笠原美智子、樫木野衣、林道郎、水沢勉